

—原著—

舌痛症に対する治療効果と心理テストとの関係

野村 務, 小林 正治, 鈴木 一郎,
新垣 晋, 齊藤 力

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻
顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野
(主任: 齊藤 力教授)

Relationships between psychiatric analysis including
TEG and treatment outcome in patients with glossodynia.

Tsutomu Nomura, Tadaharu Kobayashi, Ichiro Suzuki,
Susumu Shingaki, Chikara Saito

*Division of Reconstructive Surgery for Oral and
Maxillofacial Region, Department of
Tissue Regeneration and Reconstruction,
Course for Oral Life Science,
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences
(Chief: Prof. Chikara Saito).*

平成16年4月6日受付 4月6日受理

Key words: 舌痛症 (glossodynia), エゴグラム (Egogram), 心理テスト (psychiatric tests)

Abstract: The relationships between the result of four psychiatric tests, and Visual Analogue Scale (VAS) and the treatment outcome of 5 males and 10 females with glossodynia were studied. The tests included Cornell Medical Index (CMI), Self-Rating Questionnaire for Depression (SRQ-D), State-Trait Anxiety Inventory (STAI), and Questionnaire of the Tokyo University Egogram (TEG).

Eight patients were classified as grade I, 4 as grade II and 3 as grade III in CMI. Two patients were diagnosed as borderline, 2 were suspicious of mild depression and the 12 other patients were normal in SRQ-D. High STAI I scores were recorded in 5 patients, and 2 had high STAI II scores. In the TEG analysis, 6 patterns (6 flat type, 5 N shape, 1 U shape, 1 inverted N shape, 1 NP superior type and 1 NP inferior pattern) were demonstrated.

The correlation with VAS was seen in only STAI II. In terms of treatment outcome, high CP and low NP in TEG were related to good outcome. And the others-negative group had significantly better outcome than the others-positive group.

The usefulness of psychiatric tests including TEG for evaluation of patients with glossodynia and prediction of outcome was presented.

抄録: 男性5名, 女性10名の舌痛症患者について, 4種類の心理テストとVisual Analogue scale (VAS) による治療効果との相関について分析を行った。心理テストは, Cornell Medical Index (CMI), Self-Rating Questionnaire for Depression (SRQ-D), State-Trait Anxiety Inventory (STAI), およびQuestionnaire of the Tokyo University Egogram (TEG) を施行した。CMIにおいて8名は領域I, 4名は領域II, 3名はIIIであった。またSRQ-Dにおいては2名が境界領域, 2名が軽度うつ症の疑いであり, 他の12名は正常であった。STAI Iでは5名に, STAI IIでは2名が高値を示した。TEGでは6パターンが認められ, 平坦型が6名, N型が5名, U型, 逆N型, NP優位型, NP低位型が各1名であった。

VASとの相関はSTAI IIのみに認められた。治療効果に関してはTEGにおいて、CPのスコアが高く、かつNPのスコアが低くなるほど、治療効果がよかった。そして他者否定群は他者肯定群より統計学的に良好な治療効果を認めた。

舌痛症患者の評価と治療効果の予測のためには、TEGを含めた心理テストが有用であることが示された。

緒 言

舌痛症は心身医学的要因が関与しているといわれているが、本症について詳細に検討した報告は比較的少ない。そこで我々は舌痛症患者の臨床所見とその背景因子について検索を行ってきた¹⁾。今回は、東大式エゴグラムを含む4種類の心理テストを用いて、本症患者の心理状態について分析を行い、その予後との関係について検討するとともに、各心理テストの有効性について調査を行った。

研究対象および方法

対象は新潟大学歯学部附属病院口腔再建外科で舌痛症と診断されたもののうち、治療効果の判定が可能であった15名である。診断基準は舌に器質的変化を認めず、かつ血液検査等に異常値を示さず、舌の疼痛を訴える患者とした。診断には当科の舌痛症プロトコールおよびアンケートを使用した¹⁾。患者の性別は男性5名、女性10名であり、年齢は30-75歳で、平均は52.5歳であった。また職業は15名中9名が無職であった。既往歴はアレルギー疾患(4名)、婦人科疾患(3名)、耳鼻科疾患(3名)などが多く認められた。来院までの病歴期間は1年以内が8名で、他の7名は1年以上であった。舌痛部位は舌尖部が11名、舌側縁部が10名、舌中央部が6名、舌根部が5名であった。また5名は舌全体の疼痛を訴えていた。舌痛以外の訴えは口腔乾燥(7名)、口内違和感(4名)、歯肉・口蓋痛(2名)、味覚異常(1名)などがみられた。心理状態では11名に不安感が認められ、さらに不眠(4名)、癌恐怖症(3名)も多くみられた。

心理テストにはCornell Medical Index (CMI), Self-Rating Questionnaire for Depression (SRQ-D), State-Trait Anxiety Inventory (STAI), 東大式エゴグラム (TEG) の4種類を用いた。TEGはパターン分析²⁾を行うとともにCP, NP, A,FC, ACの5尺度のスコアも算出した。本症の治療効果はVisual Analogue Scale (VAS) により判定した。VAS値が0になったものを著効, VAS値が初診時より低下したものを有効, VAS値の変化がみられなかったものを無効とした。

舌痛症の治療は初診時より簡易精神療法を行うとともに、抗不安剤などの薬物療法、さらに必要な場合は心療内科との対診を行った。簡易精神療法とは面接治療法の

基本的方法であり、患者の訴えを共感をもって受容し、検査結果をもとに理解や再学習によって患者を支持し、治療に対する保証を行う方法である。

その結果、著効が7名、有効が7名、無効が1名で、著効と有効をあわせた有効率は93%であった。なお統計処理はSPSS (SPSS Inc.) により回帰分析およびクロス集計表を用いた χ^2 乗検定をおこなった。

結 果

CMIの結果は領域Iが8名、領域IIが4名、領域IIIが3名であった。14名に行ったSRQ-Dでは、得点が11-15点のボーダーラインが2名(14%)、16点以上の軽度うつ症が疑われる症例が2名(14%)であった。状況不安を示すSTAI Iでは5名に高値を認め、特性不安を示すSTAI IIでは2名が高値を示した。TEGの結果では健常人に多いとされる平坦型が6名(40%)にみられ、ついでN型が5名(33%)、U型、逆N型、NP優位型、NP低位型が各1名ずつ認められた。

初診時のVAS値、治療効果と各心理テストの関係をみると、CMIの領域とVAS値間には相関はみられなかった。治療効果ではCMIの領域が高くなるほど、著効の率が増える傾向がみられたが有意差は認められなかった(図1)。VAS値とSRQ-Dのスコアとの相関はみられなかったが、無効群の1名は16と著しく高値を示した(図2)。STAI IのスコアとVAS値の相関はみられなかった。STAI IIでは $p=0.005$ で両者に相関を認めた。このことから特性不安をもつ患者の初診時のVAS値は高くなることが示唆された(図3)。治療効果とSTAIは明らかな関連は認められなかった(図4)。TEGにおけるCP, NP, A,FC, ACの5尺度の各スコアとVAS値では、明らかな相関はみとめられなかった(図5)。治療効果との関係では、CPのスコアが高くなるほど、またNPのスコアが低くなるほど治療効果のあることが示された。次に類型分析では、 $FC \geq AC$ を自己肯定、 $FC < AC$ を自己否定、また $CP \leq NP$ を他者肯定、 $CP > NP$ を他者否定²⁾とすると、自己肯定群では7名中著効が4名(57%)、自己否定群では8名中3名(38%)であり、差を認めなかった(表)。また他者肯定群9名中、2名が著効(22%)、他者否定群では6名中5名が著効(83%)であり、 $p < 0.001$ で両群間に有意差を認めた。

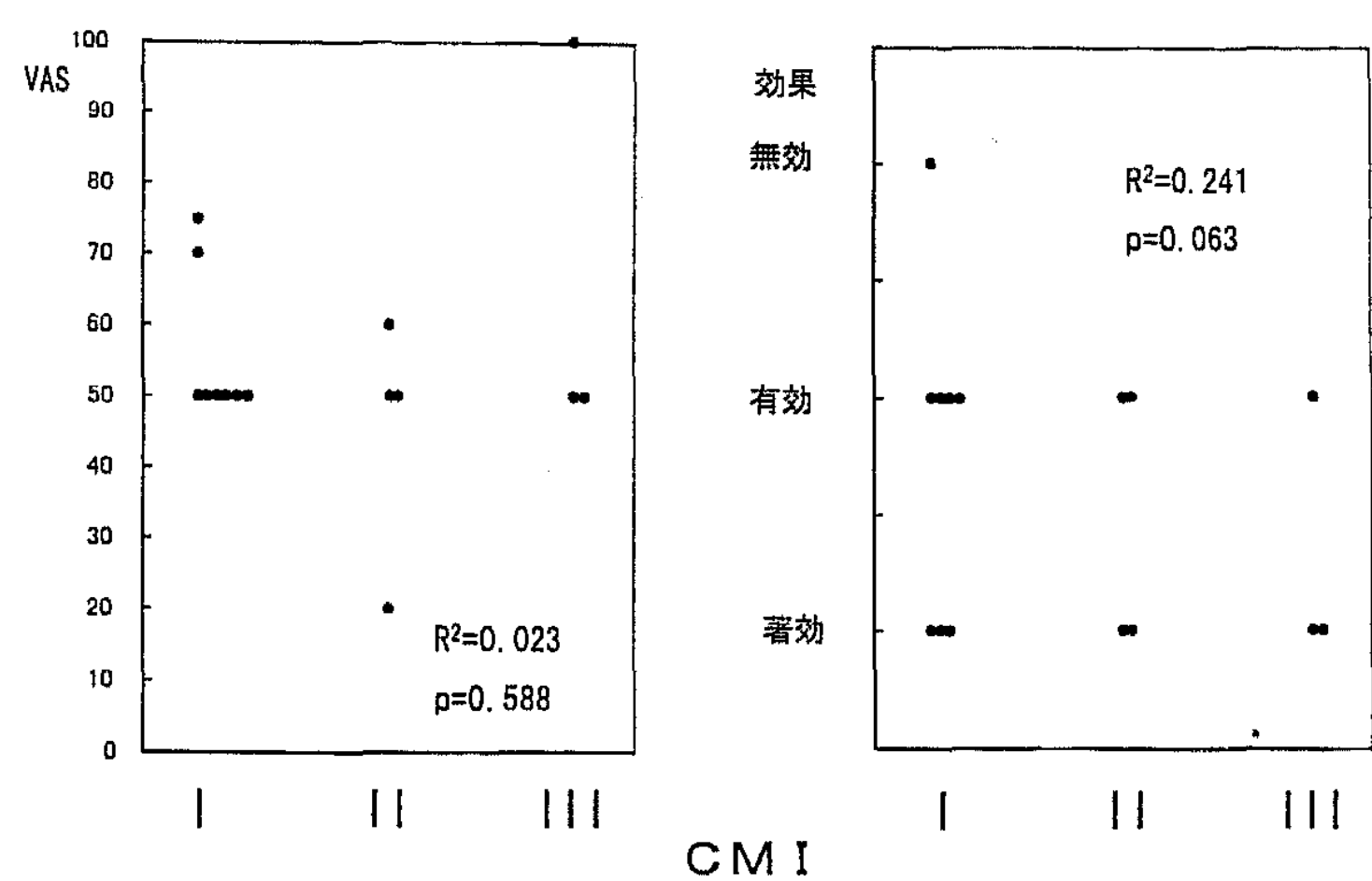


図1 CMIとVAS値，治療効果。CMIの領域が高くなるほど，著効の率が増える傾向が見られた。

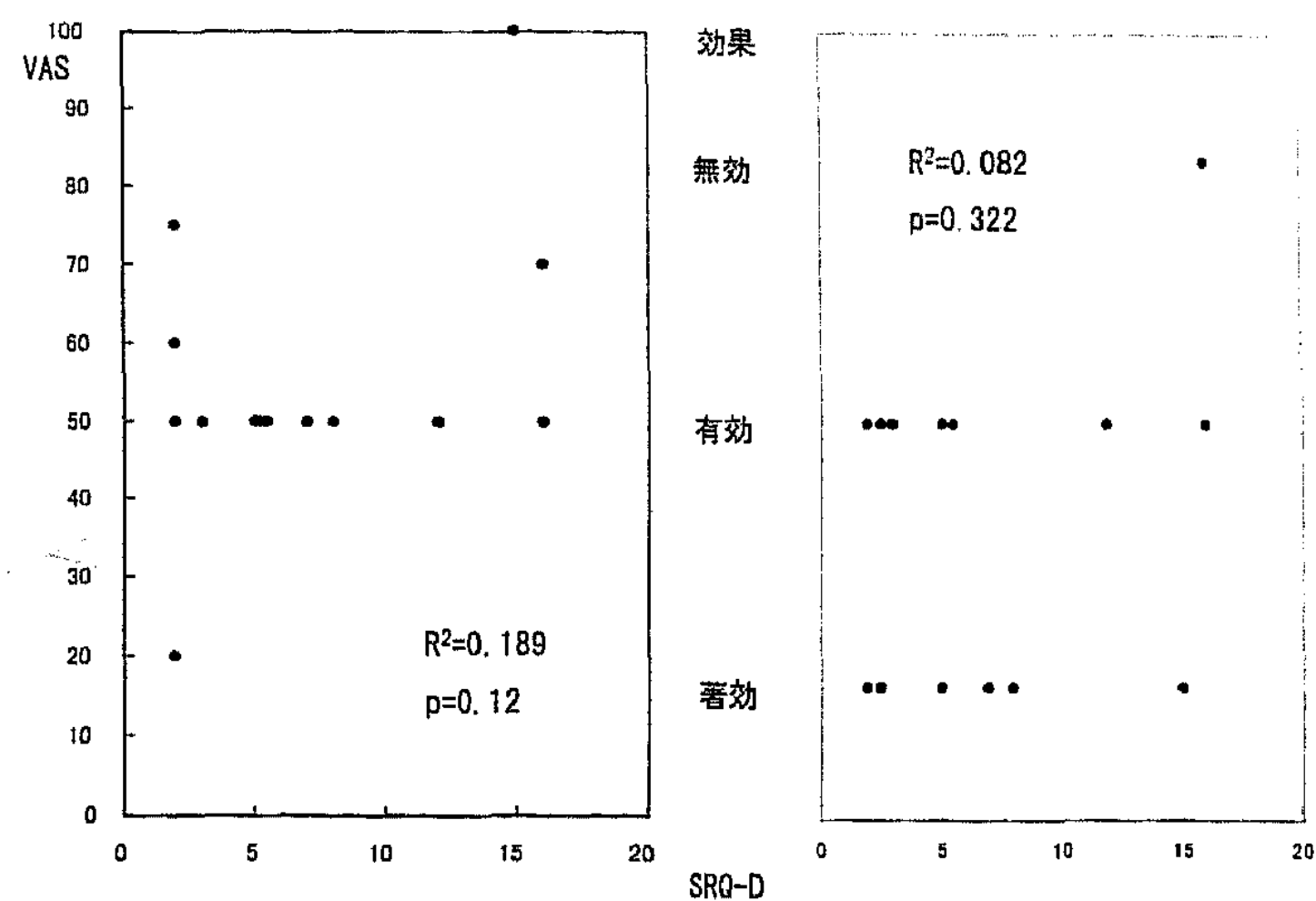


図2 SRQ-DとVAS値，治療効果。VAS値とSRQ-Dのスコアとの相関はみられなかったが，無効群の1名は16と非常に高かった。

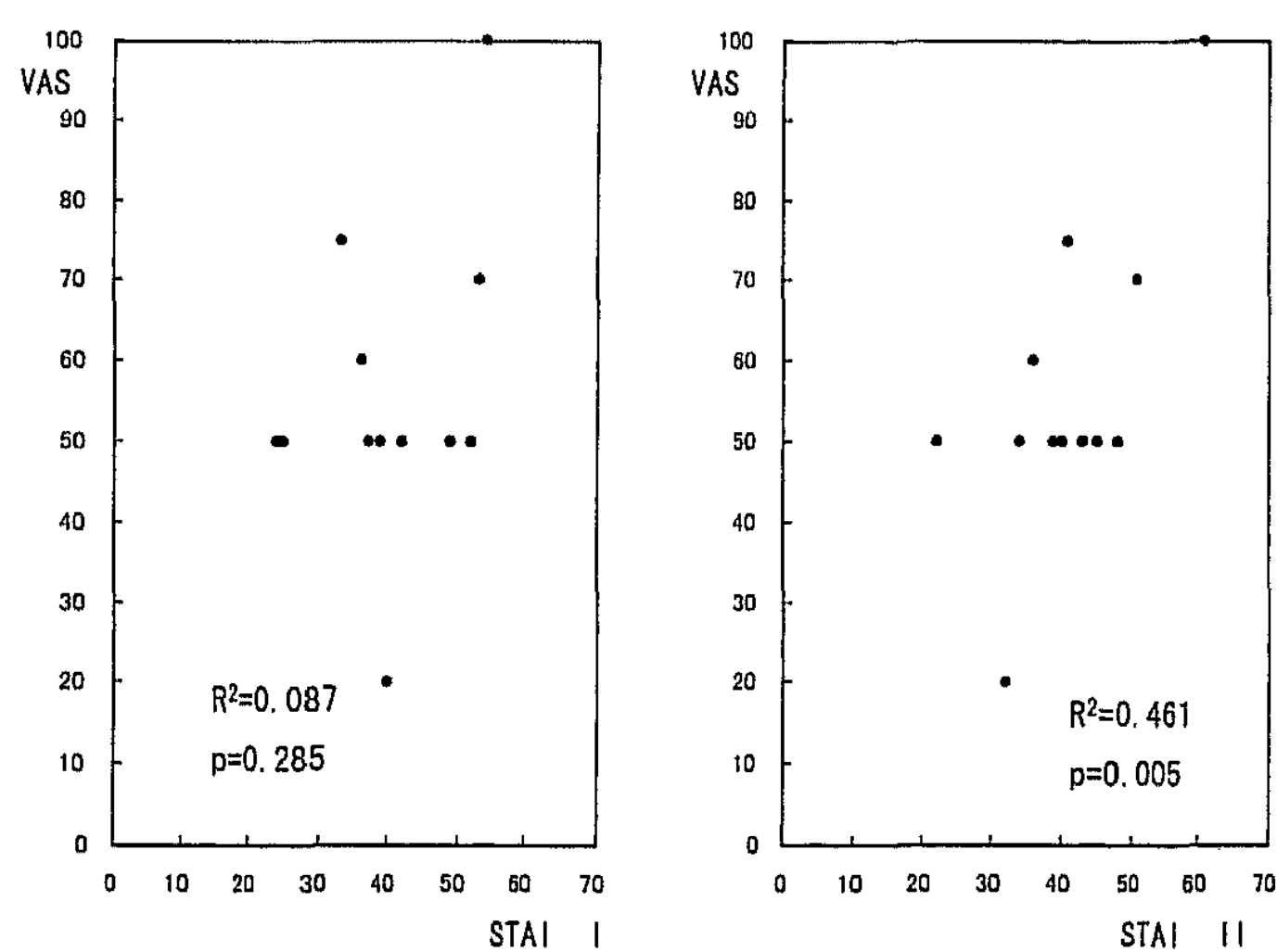


図3 STAI I, IIとVAS値の関係。STAI IのスコアとVAS値の相関はみられなかった。STAI IIでは $p=0.005$ にて相関を認めた。

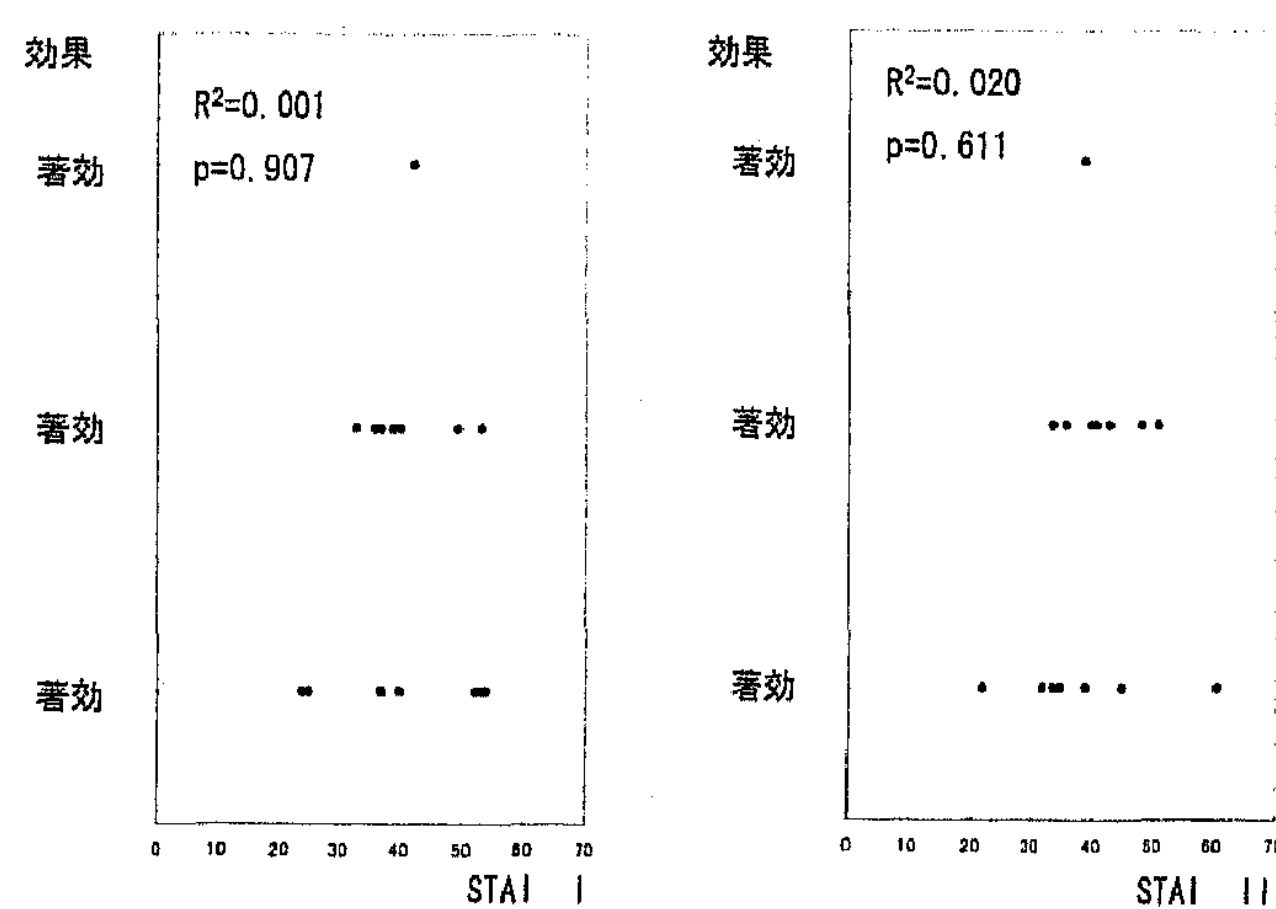


図4 STAI I, IIと治療効果の関係。治療効果とSTAIの関係では明らかな関連は認められなかった。

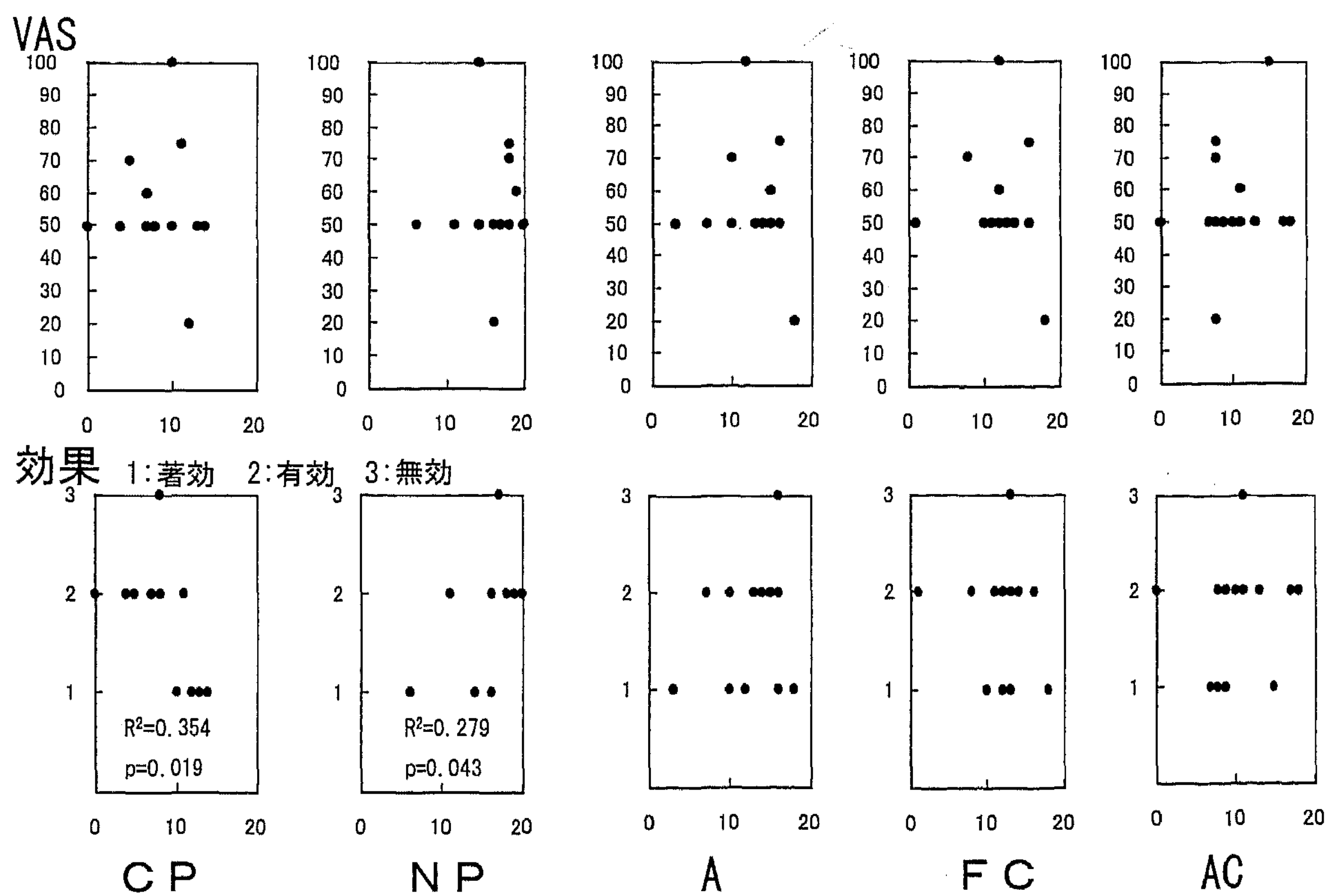


図5 TEG 5 尺度とVAS値，治療効果。治療効果では，CPのスコアが高くなるほど，NPのスコアが低くなるほど，治療効果があることが示された。

表 TEGの類型分析と治療効果

	自己肯定 (FC \geq AC)	自己否定 (FC<AC)
著 効	4 (57%)	3 (38%)
有 効	2 (29%)	5 (71%)
無 効	1 (100%)	0 (0%)

	他者肯定 (CP \leq NP)	他者否定 (CP>NP)
著 効	2 (22%)	5 (83%)
有 効	6 (86%)	1 (14%)
無 効	1 (100%)	0 (0%)

考 察

舌痛症患者に4種類の心理テストを行い、治療効果との関係について分析を行った。CMIは主として身体的自覚症状についての質問144項目と、精神的自覚症状についての質問195項目からなる質問紙法の一つであり、一般に神経症的傾向の判定に使われる。この検査では領域I, IIは正常, III以上は神経症的傾向が疑われる。本研究ではCMIが高値になるほど、著効の率が増える傾向が見られたが、統計学的には有意差はなかった。筆者らの前回の報告¹⁾では初診時のVAS値とCMIに相関を認めたが、今回は複数の心理テストを施行した患者を対象としたため、対象患者数が少なかったことが原因しているものと思われた。SRQ-Dは東邦大学医学部心療内科で考案されたmasked depressionのスクリーニング用紙である。SRQ-Dでは軽度うつ症を疑ってよい症例が2名(14%)あった。永井ら³⁾も、舌痛症におけるその割合は11.5%であったと報告しており、舌痛と抑うつとの関係が示唆された。STAIは不安を評価する心理テストであり、STAI Iは状況不安を、STAI IIは特性不安を示すものである。今回、STAI IIではそのスコアとVAS値との間に相関を認め、特性不安をもつ患者の初診時のVAS値は高くなることが示された。よって不安が患者の背景に存在すると考えられたことから、舌痛症の治療には抗不安療法が有効である可能性が示唆された。TEGは東京大学医学部心療内科において開発されたエゴグラムである。エゴグラムとは心理療法、社会生活の基本となる自己分析をグラフに書いたもので、親の自分(Parent:P)、大人の自分(Adult:A)、子供の自分(Child:C)の3つの自我状態からなる。さらにPは父親のような批判的なCritical Parent(CP)と、母親のような教育的なNurturing Parent(NP)に分かれる。Cは、さらにもってうまれたままの自由なFree Child(FC)と順応したAdapted Child(AC)に分かれる。TEGの評価は一般的に、CP, NP, A, FC, ACの各スコアをグラフ上に

プロットし、そのパターンで判断するパターン分析により行われる。これは各個人の心理的特徴を判定するには有効であるが、パターンが多岐にわたるため、今回の治療効果との関係をみるのには不適であった。またCP, NP, A, FC, ACの5尺度について各スコアでみると、CPのスコアが高くなるほど、またNPのスコアが低くなるほど治療効果があることが示された。さらにCPとNPの関係についてみると、他者否定群に著効の割合が多かった。会田ら⁴⁾は慢性疼痛患者について調査を行い、今回の我々の他者肯定群に近い山型(A中心, NP中心)患者において、治療効果が良くなかったことを報告しており、我々の今回の結果と近似していた。他者否定群で治療効果が大きかったことは、CPが主導権を握り、自他ともに厳しく、かつ責任感が強いタイプの患者は治療によく反応する事が考えられた。

以上の結果から舌痛症の背景には心身医学的要因が強く関与し、その客観的評価と治療効果の予測のためにTEGを含めた心理テストが有用であることが示唆された。

結 語

1. VAS値とSTAI IIのスコアとの間で相関を認めた。
2. TEGにおいてCPのスコアが高く、NPのスコアが低くなるほど、また他者否定群は他者肯定群より良好な治療効果を認めた。
3. 舌痛症の背景に心因的要素が強く関与し、その客観的評価と治療効果の予測のためにTEGを含めた心理テストが有用であることが示された。

本論分の要旨の一部は、第41回日本口腔外科学会総会(平成8年11月東京)で発表した。

文 献

- 1) 野村 務, 岡田朋子, 古川達也, 加納浩之, 中島民雄: 舌痛症における背景因子と治療効果の関係について. 新潟歯学会雑誌, 29:125-128, 1999.
- 2) 東京大学医学部心療内科 編著: 新版エゴグラム・パターン -TEG(東大式エゴグラム)第2版による性格分析-, 金子書房, 東京, 1995.
- 3) 永井哲夫, 須佐見英作, 他: 舌痛症の診断と治療に関する研究 第4報 質問紙法による心理的特性の解析. 口科誌, 37:1026-1032, 1988.
- 4) 会田耕三, 中山宏, 他: 慢性疼痛患者のエゴグラムよりみた心理的特徴とその対応の仕方. 慢性疼痛, 15:71-74, 1996.